～プログラムノート～　　浅野 繁

■ J. S. バッハ：平均律クラヴィーア曲集 第１巻より

・第１番　ハ長調　BWV846

「前奏曲」はグノーの「アベマリア」としてもよく知られている。ハーモニーの美しさのみならず、内なる旋律も感じられ、シンプルながらも音楽的発想に溢れた作品である。

「フーガ」は人の歩みを思わせる音階で始まり、それはハ長調の７音、全てから始まっている。平安な前奏曲に続いて、人々が教会に集い、オルガンバスが鳴り、祈りの中に消える。

私の一つのイメージである。

・第24番　ロ短調　BWV869

「前奏曲」Andante（歩くような速さで）

トリオ・ソナタ形式で書かれ、バロック音楽の美しさに満ち溢れている。

「フーガ」Largo（幅広く、ゆったりと）

２つの分散和音を〈溜息〉のモチーフで繋げ、12 音全てを使った主題は、変化を駆使した対旋律と相まって人の様々な感情を紡ぎ出している。

この第１巻は 1722 年に書かれ、バッハはタイトルの後に次のように記している。「音楽が好きで学習熱心な若者の有益な利用に、更には既にこの道に熟達した人達の特別な愉しみに供されよう。」

■ L. v. ベートーヴェン：ピアノソナタ　第 32 番 ハ短調 Op.111

・第１楽章　Maestoso-Allegro con brio ed appassionato

（堂々と威厳を持って）（快速に、生気と情熱を持って）

強烈な音とリズムを持った減七の和音で始まる荘厳な序奏部は圧巻である。上昇する４度の旋律が Allegro 部を導き出す。主要テーマ、展開部に於けるテーマ動機発展、第２主題の優しさ等、何よりも余分なものを削ぎ落とし、凝縮され、生気に溢れ情熱的な音楽は、作曲とピアノという楽器を知り尽くしたベートーヴェンそのものである。

・第２楽章　Arietta: Adagio molto semplice e cantabile

（アリエッタ）（非常にゆっくりと、単純にそして歌うように）

作品 111 が最後のピアノソナタである事、かつ大変な高みにある音楽であることを知識としては知っていたが、正直聴いても凄い曲だなと思うばかりで特にこの第２楽章はよく分からなかった。東日本大震災の後だろうか、Arietta（小さなアリア）をポツポツと弾き始めたのは…。ハ長調の至って素朴な分かり易いメロディと時代を越えた様な和声使いが隠れた魅力になっている。大まかに５つの変奏とコーダから成っているが、主題、又は主題モチーフがポリフォニックに、リズムの分割を伴って有機的に進められる。分散和音で喜びを歌い上げた後、一旦静まり高音の特徴的なトリルが現れる。５度音程による移行を経て再び主題旋律が原型で現れ歓喜の音楽を奏でる。再度 トリルに合わせ左トレモロを伴って主題の前半のみが歌われ、高音域からの下行音階の後、祈りのように終わる。人間技とは思えない奇跡のような音楽である。

■ F. シューベルト：人生の嵐 イ短調　D 947

Allegro ma non troppo　2/2 拍子（快速に、しかし過ぎないで）

幻想曲　ヘ短調　D 940　　ロンド　イ長調　D　951　と並ぶ最晩年の連弾曲傑作の一つ。ソナタ形式（提示部. 展開部. 再現部. コーダ）で書かれているが、展開部開始の第 1 主題のヘ短調は独創的であり、エピソード楽句の音楽的な充実度を考えるとロンド形式のようにも見えてくる。いずれにしろ、第 1 主題モチーフの有機的な発展、ミサ曲を思わせる美しさを持った第 2 主題、転調の移り変わり、そして展開部に見られる対位法的書法はシンフォニックでもあり、壮大なソナタの第 1 楽章として書き始めたという説も頷ける。

Duo（デュオ）として遺されたこの曲は、シューベルトの死後 12 年の後に「人生の嵐」の
タイトルで出版された。31 年の短い人生ながら、幼少期から天才と称されつつもベートーヴェンを師と仰ぎ、時代を超えてひたすら音楽を求め続けた彼の人生が聞こえてくるようである。

■ F. シューベルト：ファンタジー ヘ短調　D 940

Allegro molto moderato（快速に極めて中庸な速さで）－Largo（幅広くゆっくりと）－
Allegro vivace（快速に生き生きと）－Tempo I（初めの速度で）

4 つの部分からなり、休みなく続く一曲のソナタと考えられる。憂いを帯びた伴奏に導かれ歌われる叙情的なメロディが印象的である。4 度音程のモチーフが曲の随所に用いられ、曲に統一感と構成感を与えている。プリモとセコンドの二重唱のような掛け合い、技巧的にも交響的な響きなど、連弾の魅力に溢れ、正に名作である。

最晩年の作にも関わらずシューベルトと友人によって初演されており、出版に当たっては、エステルハーツィ伯爵令嬢カロリーネに捧げられた。カロリーネへの想いも、この「幻想」の中には込められているのだろうか…。